

第2回内国勸業博覧会の歯科出品物

第1報 歯科器材について*

大橋 正敬** 仁平真佐秀** 長谷川 清**
竹井 満久** 小田 邦雄** 大越 肇**

1. 緒言

わが国の近代化を推進するために、富国強兵、殖産興業を旗印として各種の改革を行ってきた明治政府は、博覧会を開催して勸業することを重要な政策として取上げ、明治10年(1877年)東京上野において、政府主催による第1回内国勸業博覧会を開催した。この博覧会は大成功で所期の目的を十分に果した。この出品物の中には、わずかながら歯科関係の義歯を主とする歯科器材や歯磨が出品され、大橋ら¹⁾は、さきにこれら出品物およびその審査結果について詳細な報告を行った。

第1回内国勸業博覧会で所期の成果をあげた政府は、明治14年(1881年)3月1日より6月30日までの122日間、同じく東京上野において、第2回内国勸業博覧会を開催した。このときの歯科出品物については、渡辺良斉がこれに出品し受賞した記録²⁾があるだけで、その全貌を知ることなく今日に至った。

著者らは、今回、この第2回内国勸業博覧会に展示された歯科出品物について調査したところ、さらに新しい史実を明らかにすることができたので、第1報として歯科器材出品物について報告する。

2. 研究資料と方法

本研究には、主な資料として内国勸業博覧会事務局編集の第2回内国勸業博覧会出品目録³⁻⁷⁾を用いた。

第2回内国勸業博覧会は、前回と同じように、第1区 鉱業および冶金術、第2区 製造品、第3区 美術、第4区 機械、第5区 農業および第6区 園芸の6区に大別され、各区はさらに細別された⁸⁾。歯科器材は第2区第15類(医術上の用器)、歯磨は第2区第1類(化学製品および調剤品)、歯ブラシと楊枝は第2区第11類(衣服および装飾)に含まれていた。本研究は、第1報としてこのうちの歯科器材について、第2区第15類を中心に調査を行なった。

3. 歯学史的事項

東京府からの歯科器材の出品(図1~4)^{3,4)}は次の通りであった。なお、出品名の前の()内の数字は出品番号を示す。

○石代重兵衛³⁾ 北元町

医療器械器具として12点を出品したが、歯科用としては次の製品だけであった。(図1)

(4)囊装抜歯器 鋼鉄、歯ヲ摘除スルノ用器、西洋模造。

製造人：島根国太郎、本所区北新町

○岩本五兵衛³⁾ 日本橋本町3丁目

18点の出品中、歯科用としては次の製品だけであった。(図1)

(14)摘歯器械 鋼鉄

製造人：島根七兵衛、本所区北新町

* Dental products exhibited at the Second National Exposition for the Encouragement of Industry, I. Dental materials, instruments and equipment

** Masayoshi Ohashi, Masahide Nihei, Kiyoshi Hasegawa, Mitsuhiisa Takei, Kunio Oda and Hajime Ogoshi: Department of Dental Materials, Nihon University School of Dentistry 日本大学歯学部理工学教室

[illegible]

二百八十三

[illegible][illegible]

獵銃（谷田鎮） 獵銃止下谷田町順（谷田鎮） 増田大次郎
 大島 根付鉄炮（土庫雷落鐵炮） （町） 明 珍 盛
 富士見町 丁目明珍盛
 砲舟（圖） 芝蔴鐵三級（町） 近藤基樹
 甚近（圖） 砲舟（圖） 駿從上（圖） 砲舟（圖） 上（圖） 砲
 舟（圖） 上（圖）
 佩劍（佩劍組給半角備用） 松崎茂助
 提燈組東帶竹角鐵鑢（町）
 下町藤崎（圖） 佩劍（圖） 佩劍（圖） 佩劍（圖） 佩劍（圖）
 青森（圖） 佩劍（圖） 佩劍（圖） 佩劍（圖） 佩劍（圖）
 銀（東常侍同） 植原安藏（字田） 渡邊仁兵衛門
 擊劍道具（竹刀木被外擊） 上（圖） 上（圖） 上（圖） 上（圖）
 朱塗（竹刀） 芝田川町渡邊右衛門
 皆門（師中） 上（圖） 上（圖） 上（圖） 上（圖）
 竹筒（師中） 上（圖） 上（圖） 上（圖） 上（圖）
 自屋（同上）
 擊劍道具（鐵木被革竹筒） （町） 卯牧治兵衛

○松本市左衛門³⁾ 日本橋本町3丁目

18点の出品中，歯科用としては次の製品だけであった。（図1，2）

(13) 齒療器 鋼真鍮，西洋模造

製造人：桐藤新三郎，小石川掃除町

○松下貞治³⁾ 本郷湯島6丁目(図2)

(1)義齒	金銀陶齒，男子上下總入齒
(2)義齒	護謨齲陶齒，同上
(3)義齒	同上，同上
(4)義齒	同上，同上
(5)義齒	鯢齲陶齒，同上
(6)義齒	水牛齲陶齒，同上
(7)義齒	黑檀齲陶齒，同上
(8)義齒	黃楊齲生齒，同上
(9)義齒	黃楊齲蠟石齒，同上
(10)義齒	黃楊齲鯢齒，同上
(11)義齒	黃楊齲蠟石齒，同上
(12)義齒	同上，同上
(13)義齒	黃楊，齒齲共彫，女子上下總入齒
(14)義齒	金銀陶齒，男子上齒1枚入齒

東京府 第二區 第十四類

[illegible]

二百八十四

[illegible]

图 2

- 螺柱ヲ以テ毀損セシ齒エセメント
ニテ接続ス。
- (7)假齒 金磁ロックセメント，磁齒エ金ノ
螺柱ヲ以テ毀損セシ齒エセメント
ニ代ルニ金片ヲ用ユ。
- (8)假齒 金，金ヲ以齒孔ヲ填塞ス。
- (9)假齒 磁ピンクロツプールゴム，ゴムヲ
肉トシ齒齦附ノ磁ヲ造ル。
- (10)假齒 ピンクロツプールゴム磁金，ゴム
ヲ肉トシ齒齦附ノ磁ヲ造リゴム脆
弱ヲ保全スルカ為ニ金網ゴムノ内
ニ平布ス。
- (11)假齒 ピンクロツプールゴム，デンター
ルゴム磁，デンタールゴムヲ裏面
トシ表面エピンクロツプールゴム
ヲ用ユ。
- (12)假齒 ピンクロツプールゴム金磁，デ
ンタールゴムヲ裏面トシ表面ピン
クロツプールゴムヲ用ユゴム内へ
金網ヲ散布シ金環ヲ以テ左右ノ齒
ニテ保持ス。
- (13)假齒 ピンクロツプールゴム金磁，ゴム
ノ内へ金網ヲ散布シ金環ヲ以テ 2
枚ヲ保持セシム。
- (14)假齒 ピンクロツプールゴム金磁，ゴム
ノ内へ金網ヲ散布シ金環ヲ以テ 4
枚ヲ保持セシム。
- (15)假齒 ピンクロツプールゴム金磁，ゴム
ノ内へ金網ヲ散布シ金環ヲ以テ 1
枚ヲ保持セシム。

東京府以外からは次の 3 名が出品をした。

- 田中貞太郎⁵⁾ 駿河国静岡呉服町
- (1)義齒 紫檀鯨牙，男形
- (2)義齒 同上，女形
- 免養九一⁶⁾ 長門国赤間関区田中町
- (1)入齒 臺黃楊齒角黒檀，日本形，
- (2)入齒 臺護謨，陶齒，西洋形
- 佐々木治兵衛⁷⁾ 京都府下京区第五組寺町六角
下ル町

9 点の出品中，齒科に関係ある製品として次の出品があった。

- (2)外療器 鉄，齒抜
- (6)外療器 鉄，メス
- (8)外療器 銅，皮下注入器
- (9)外療器 鉄，ピンセット

4. 考 察

第 1 回内国勸業博覧会が終了して間もない明治 10 年 12 月 28 日に「内国勸業博覧会ノ儀明治十年ヲ以テ第一会トシ爾後五ケ年目毎（明治十四年ヲ以テ第二会トス）ニ被開候条此旨布告候事，但本会開説ノ場所及日限規則等ハ三ヶ年前ニ公布スヘキコト」と太政官布告が発せられ⁹⁾，予定通り明治 14 年に，政府主催で第 2 回内国勸業博覧会が，東京上野で開催された。内国勸業博覧会事務局編集の出品目録を調査した結果，その齒科出品物から当時の齒科事情の一端を明らかにすることができた。

今回の義齒の出品者は 6 名で，前回は 12 名であったので丁度半分に減ったが，全体の出品数は逆に増加した。第 1 回に引続いて今回も出品したのは，渡辺良斉および吉田仙貞の 2 名だけで，伊澤道盛，免養九一，松下貞治および田中貞太郎の 4 名は今回はじめての出品であった。

第 1 回内国勸業博覧会の齒科出品物の報告¹⁾で，渡辺良斉は医籍に登録されたいがその確認はないと述べたが，今回は，別の資料によって考証を試みたい。

齒科研究会月報 31 号（明治 26 年 8 月発行）の「日本齒科医人名」¹⁰⁾には，「日本ニ於ケル齒科医ノ数及ヒ其ノ姓名ヲ知り併セテ在住處ヲ知ラン事ヲ欲スル久シ頃者漸ク其姓名ヲ知ルヲ得タリ之レ其完全ヲ得タルモノニ非ルモ大概網羅セリ」とあり，齒科医籍登録以前で普通医籍にあるもの 19 名の名をあげているが，その中には，伊沢道盛，小幡英之助，高山紀斉らとともに渡辺良斉の名もみられる。

一方，齒科医学叢談 4 号（明治 29 年 7 月発行）の「全国ノ齒科医」¹¹⁾には，「本名簿ハ明治 29 年 6 月 1 日内務省ニ於テ調査シタルモノナレバ最モ正確ナルヲ信ズ」とあって，明治 18 年齒科医籍登録以前の普通医籍登録者 25 名中には，伊沢道盛，小

幡英之助、高山紀斉などの名はあっても、前記の「日本歯科医人名」に出ていた渡辺良斉はもちろん、瓜生源太郎、桐村克己、黒田虎太郎、山田利充らの名が出ていない。

開国歯科医人伝²⁾によれば、瓜生源太郎は明治16年4月に試験に合格、桐村克己は明治12年1月に試験に合格、黒田虎太郎は明治16年8月に開業免許を得、山田利充は明治16年9月試験に合格と、いずれも開業試験に合格しているので歯科医であることに間違いはないが、最も正確であると自信をもって調査した「全国ノ歯科医」に、これら数名の有資格者が洩れていることは、誤植であると考えられず、理解に苦しむところである。

著者ら¹⁾の第1回国内勧業博覧会の歯科出品物の報告では、東京都歯科医師会70年史¹²⁾を引用して、渡辺良斉は開業免許を下付されていると考えられるが確証がないとしたが、その名簿¹²⁾には渡辺良斉の名が出てはいるけれども、その文献が明らかにされていない。

開国歯科医人伝でも、渡辺良斉の開業試験合格の史実が明らかでない。最も正確であると自信をもっている「全国ノ歯科医」¹¹⁾に前述の数名の有資格者が洩れていたことから思考すると、歯科研究会月報の「日本歯科医人名」¹⁰⁾の方が、「完全ヲ得タルモノニ非ルモ」信頼性があると推察される。従ってこれらの有資格者と同じように渡辺良斉も歯科医であったとするのが妥当であろう。

渡辺良斉は、第1回博覧会において、非凡な彫刻義歯の製作技術を十分に発揮して龍紋賞牌を獲得したが、今回は金床あるいはゴム床に陶歯を用いた西洋義歯および長谷川保から習得した金箔充填歯を出品し、有功賞牌2等の荣誉に輝いた¹³⁾。第1回では彫刻義歯だけしか出品しなかったが、それからわずか4年後の今回は彫刻義歯を出品せず、西洋義歯だけで受賞したのは彼の非凡な義歯製作技術が西洋義歯にも遺憾なく発揮されたことを実証するものである。ことにセメントの接着を応用した義歯、あるいは金網で補強したゴム床義歯を、この種の博覧会に出品したのは彼が最初であろう。

第1回に続いて第2回にも出品した吉田仙貞に

ついては、開国歯科医人伝²⁾の吉田仙正の項に、「安政4年両親を喪いて東京に出て、神田柳原の吉用仙貞という口科医に入門したが、吉田氏に子がないため養子となった。」とある。吉用仙貞とあるのは吉田仙貞の誤植と思われる。住所が神田柳原で、出品目録の住所が神田東龍閑町となっていて、両住所が相違しているので断定はできないが、同姓同名であることにより、両博覧会に義歯を出品したのは、吉田仙正の養父である口科医吉田仙貞に先ず間違いのないものと考証される。吉田仙貞は、牛、象牙、牛歯、黒檀、黒蠟石を用いて前回と同じように彫刻義歯を出品したが、その道の専門家の1人であったと推察される。

伊沢道盛は、小幡英之助の門下生で、明治11年医術開業試験に合格した歯科医²⁾で、前述の両歯科医師名簿^{10,11)}にも彼の氏名が記載されている。今回はじめての出品で、金合金、ゴムおよびセルロイド床に陶歯を用いた西洋義歯を出品し、褒状を受賞した¹³⁾。ことに、セルロイド¹⁴⁾は、1869年米国で発明され、約10年後に英、独、仏でセルロイド工業が起り、これが直ちに歯科にも応用され、わが国にも輸入されるや彼が率先してセルロイド床の製作を試み、今回はじめてその義歯を出品したのであろう。

口科医免養九一は、アレキサンドルについて近世歯科医学を修め、さらに神翁金松について義歯の製作法を学び、明治15年11月歯科医術開業免許を受けた歯科医である²⁾。しかし、前述の両歯科医師名簿^{10,11)}には彼の氏名を見出せないが、東京都歯科医師会70年史¹²⁾には彼の氏名が出てはいる。今回、はじめて黄楊と黒檀とを用いた彫刻義歯およびゴムと陶歯とを用いた西洋義歯を出品したが、彼の義歯は、明治8年1月より約5年間学んだ神翁金松の製作法によるものであったと推察される。

松下貞治については、開国歯科医人伝²⁾の松下良貞の項に、「文久2～3年頃湯島6丁目に移り」とあり、これが出品目録³⁾の松下貞治の住所と一致することから同一人物であると思われる。今回松下貞治は、金合金やゴムと陶歯とを用いた西洋義歯および水牛、黒檀、黄楊、蠟石歯、鯨歯を用

いた彫刻義歯を出品しているが、松下良貞が義歯に長じ、晩年になって西洋入歯の技術を主として高橋富士松から習得したとの史実より思考すれば、同一人物である可能性が一層強い。

義歯出品者中、前述の免養九一は山口県より、田中貞太郎は静岡県よりの出品者で、他の4名は東京府からの出品者であった。歯科研究会月報49号（明治28年1月号）の静岡県鑑札所有者人名¹⁵⁾によれば、田中貞太郎は「抜歯」の鑑札を受けた鑑札営業者で、今回、紫檀と鯨牙とを用いた彫刻義歯を出品した。

義歯出品者6名のうち、彫刻義歯だけを出品したのは吉田仙貞および田中貞太郎の2名だけで、伊澤道盛 および 渡辺良斎 の2名は西洋義歯だけを、他の松下貞治および免養九一の2名は彫刻義歯および西洋義歯の両者を出品した。第1回博覧会¹⁾の義歯出品者12名のほとんどは木床義歯を主とする彫刻義歯で、ゴム床を用いた西洋義歯の出品はわずか2名でそれも彫刻義歯と一緒に出品していたのに比べると西洋義歯の出品数も増加し、わずか4年の間に西洋義歯製作技術が普及しつつあったことが理解される。また、わずかではあるが、渡辺良斎および松下貞治の両名が、金充填物を出品しているが、これも第1回博覧会にはなかった出品物で、金箔充填も徐々に臨床に応用されていたことが理解される。

このように、4年前に比べると徐々に西洋歯科医学が普及されてきたが、それに使用されるゴム、セルロイド、陶歯、セメント、金箔などの材料は、当時わが国で生産することができず、すべて欧米からの輸入に依存していた¹⁶⁾。

歯科器具の出品者は、松本市左衛門、石代重兵衛、岩本五兵衛および佐々木治兵衛の4名で、第1回のときは愛知県から岡谷惣助が歯抜と口中三ツ道具を出品しただけに比べ、今回は出品者が増えた。出品目録では、石代重兵衛の重が十になっているが、第1回の出品目録や審査評語¹⁾でも、また今回の審査評語¹³⁾でも重となっているので、十は明らかに重の誤植である。岡谷惣助は今回も出品したが、医科用器具ばかりで、歯科用のものはなかった。松本市左衛門、石代重兵衛、岩本五

兵衛の3名は、前回にも出品したが医療器械器具ばかりであった。今回は医科用が主で、歯科製品を各1点を出品したに過ぎない。これら3名の出品した歯科器具は、いずれも自家製のものでなく、それぞれ桐藤新三郎、島根国太郎、島根七兵衛の製造したもので、当時はまだ歯科専門の製造業者は存在しなかったようである。その製品は出品目録にも明記されているように欧米の模造品であった。

桐藤新三郎は、第1回には自家製医療器具として鋼鉄製の鋸、鋏、メスを出品し、松本市左衛門出品の呼吸計を製作したが、今回は同じく松本市左衛門出品の歯療器を製造した他、自から縫創器、子宮刀、尿道刀および石淋碎石子の4点（図2）を出品した。今回、彼はこれらの製作品物に対して有功賞牌1等を受賞¹³⁾しているので、彼の製作技術は当時一流のものであったと推察される。

島根国太郎および島根七兵衛は、住所が同じ本所区北新町であるので、兄弟か、親類であったかも知れない。両名は、前回も今回も自から出品しなかったけれども、今回、それぞれ石代重兵衛および岩本五兵衛出品物の一部の製造人として褒状¹³⁾の榮譽を受けていることを考えると、極めて熟練した職人であったと考察される。

5. 結 論

明治14年（1881年）、東京上野で、政府主催の第2回内国勸業博覧会が開催され、それに出品された歯科器材について、同博覧会の出品目録を主な資料として調査した結果、次の結論を得た。

(1) 歯科器械器具の出品者は、松本市左衛門、石代重兵衛、岩本五兵衛および佐々木治兵衛の4名で、医療器具の一部として、それぞれ歯療器、嚢装抜歯器、摘歯器械および外療器（歯抜）を出品した。

(2) 佐々木治兵衛以外の3名の歯科器械器具は、それぞれ桐藤新三郎（松本市左衛門出品製造人）、島根国太郎（石代重兵衛出品製造人）、島根七兵衛（岩本五兵衛出品製造人）によって製作されたものであった。

(3) 義歯の出品者は6名で、第1回博覧会に続

いて今回も出品したのは、渡辺良斎および吉田仙貞の2名であった。

(4) 伊沢道盛および渡辺良斎の2名は西洋義歯だけを、免養九一および松下貞治の2名は彫刻義歯と西洋義歯との両者を、吉田仙貞および田中貞太郎の2名は彫刻義歯だけを出品した。

(5) 西洋義歯の製作法が普及したために、その出品者数が第1回博覧会に比べて増加した。

(6) 渡辺良斎および松下貞治の両名は金箔充填歯も出品した。

文 献

- 1) 大橋正敬，ほか：第1回内国勸業博覧会の歯科出品物とその審査結果，歯医史，5巻4号，42-50，1978.
- 2) 今田見信：開国歯科医人伝，1版，医歯薬出版，東京，1973.
- 3) 内国勸業博覧会事務局：第2回内国勸業博覧会出品目録，第2区，初篇2，東京府，283-285，1881.

- 4) 同上，2篇2，東京府，9-10，1881.
- 5) 同上，初篇2，静岡県，19，1881.
- 6) 同上，初篇2，山口県，13，1881.
- 7) 同上，2篇2，京都府，42-43，1881.
- 8) 山本義俊：第2回内国勸業博覧会案内，山本義俊刊，8-13，1881.
- 9) 山本光雄：日本博覧会史，理想社，東京，30，1970.
- 10) 日本歯科医人名，歯科研究会月報，31号，26-30，1893.
- 11) 全国ノ歯科医，歯科医学叢談，4号，35-40，1896.
- 12) 東京都歯科医師会：東京都歯科医師会70年史，東京都歯科医師会，東京，24，1968.
- 13) 大橋正敬，ほか：第2回内国勸業博覧会歯科出品物の審査結果，第1報 歯科器材について，歯医史（投稿中）
- 14) 湯浅光朝：科学文化史 年表，中央公論社，東京，95，1976.
- 15) 静岡県鑑札所有者人名，歯科研究会月報，49号，43-45，1895.
- 16) 大橋正敬：わが国初期の歯科器材の変遷，日本大学総長指定特別研究（投稿中）